

農村地域に社会的企業として経営する共働学舎新得農場

— さまざまな人たちと共に働き生活する場所 —

Kyodo Gakusha Shintoku Farm is managing as a social enterprise in rural areas

— A place to work and live with a variety of people —

金 玉禮 Okrea KIN

新得共働学舎ぶどうの会 Shintoku Kyodo Gakusha Grape Society

Key words: 生きる力、協働、自己決定

目的

厚生労働省(2015)は「誰もが支え合う地域の構築に向けた福祉サービスの実現;新たな時代に対応した福祉提供のビジョン」、「地方創生に向けた自治体 SDGs の推進(2017;環境省)」である。経済・社会・環境の統合的向上の実現とあらゆる人々の活躍の推進、障害者の自立と社会参加支援、環境の保全などを考慮した地域づくりに重点が置かれている。本研究は、共働学舎新得農場で協働生活をしている人たちに注目する。メンバーたちは、健常者や障害者であり、不完全な部分がありながらも自労自活の生活を行ない農場経営に携わっている。

方法

調査期間;2019年12月末日~2020年3月末日までの期間。
調査対象;メンバー9名、個別的に半構造インタビューした。インタビュー内容は、①ここでの働き方、仕事の内容、②生きがい、やりがい、③持続して働き続けるコツなどを聞く。「ミントル」に関しては、①開設まで経緯、②開設時の地域の人たちとの関係、状況、③運営を継続するための工夫などである。分析方法は、ナラティブ分析(灘光・浅井 2014)を参考にする。①語り手の感情や具体的な出来事、語り手自身の経験に注目する、②語りによる個人的記憶を選択し体験に注目してまとめる。

結果と考察

働き方が不完全であっても自らの選択と自己決定;みんなが利用する食堂で毎朝食前に作業や仕事の意思表示する「朝の会」を行なう。自らの作業する行動をみんなの前で伝達する。「自分のできること」を申告して仕事を実施する。彼らの働き方の意義は、①自分の役割を見出す、②不完全であっても自分自身の能力を積極的に活かす、③お互いに協力しあう、④自身の考えと身体を使って行動する(宮嶋 1998)。この農場は、就労支援A型、B型でなく、社会的課題を解決する事業として福祉施設でもない自立した経営を行なう第三の場所である(宮嶋 2011)。メンバーたちは、農業を営む家族であり、生活に必要なモノを得られるように勤労生活を続け寝食を共にする関係がある。ここでの協働生活は、協力社会、自然に沿って生きる、自分たちの力で生きる、としている。また、壁にぶち当たり、なかなか達成できないことでも前向きに続けていくことにしている(宮嶋 2011)。

これらのことから、共働学舎新得農場の環境及びメンバーたちについては、①敷地内は、人、動物、微生物、水などを整えたエネルギー循環している環境がある、②自然のエネルギー

循環を暮らしに活かしている、③質のいい食物を作るための自然農法の探求、有機農業に必要なバイオダイナミック農法の実践がある、④自然からの恩恵を意識した協働生活がある、⑤農業・酪農を通して自然を守ることを意識している、⑥仕事の選択と自己決定がエンパワーメントの創出がある、⑦それぞれのメンバーの個の優位な面をみて共に生きる、⑧個々の特性を活かした働き方は、持続可能な取り組み(SDGs)の実現に繋がっている、⑨地域に愛着を持ち、繋がりを大切にする関係づくりがある、⑩農場経営は、本物を求めた独自のチーズづくりと手作業を大切にしたい働き方である、⑪「ミントル」は、メンバーたちの成果である有機野菜や平飼いの有精卵、各種チーズ、工芸品などの販売を行ない、共働学舎や新得町、帯広地域の情報を全国へ発信している。農場は、2010年の宮城県での口蹄疫発生にて畜産製品の打撃、2011年3月11日の東日本大震災による冷蔵不能なため多量のチーズ製品の返品、2018年9月6日の北海道胆振東部地震ではブラックアウトによるチーズ出荷が出来ず収益減少した状況である。近年のコロナ感染の影響でも、カフェ「ミントル」の利用者数やチーズの売上高は激減で苦境に立たされていた。だが、厳しい状況でもモノづくりの挑戦は限りなく続いている。これから言えることは、有機農法を定着させることは、農薬や化学肥料、輸入肥料を使用しないことだけでなく、生産者と消費者、人間と動植物、地域に根ざした農業を再建しようと環境・自然を守ることである。また、地産地消は、生命の循環を作り出す、地域の風土のなかで育まれている「文化」でもある。世代を超えた人との関係を大切にすることが地域の発展となり「地域力」になる(大江 2008)。彼らは、この地域で暮らし働き続けることができるのは、地域住民、農業・酪農関係の企業などの人たちや訪れるリピーターの方々とも深く関わっている。ゆったりとした時間の流れのなかで「生きる力」を創出し影響し合っているこの場所は、貴重であり必要としている人たちは後を絶たない。

参考文献

宮嶋望(2014)『いらない人間なんていない』フォレストブック、宮嶋望(2017)『共鳴力』地湧社、大江正章(2008)『地域力—食・農・まちづくり』岩波新書 1115、坪内文生(2019)「まちの居場所」日本建築学会編 発行所;鹿島出版会など。